

ないという自然に対して非常に敵対的な文明を創った。

しかし、日本はこれだけ立派な文化を育てながら、現在、農林漁業は産業としては崩壊、あるいは崩壊寸前にあり、どうやって再建するのかという深刻な問題を抱えている。

今、日本は重大な岐路に立っているのではないか。日本の農業・林業・漁業文化を踏まえた上で、日本の一次生産をどう再構築していくのかというのは、今が最後の残された時間ではないだろうかという気がする。しかし、もう遅いのかもしれない。

(文責 熱田健一)

第6回(2006年2月16日)

現代の『農』のヴィジョン ——財政学からのアプローチ——

(東京大学大学院経済学研究科教授) 神野 直彦

「私たちはあまりに簡単に幸福になりすぎた。・・・農業社会は解体され、・・・物質的には豊かになったが、・・・お互いに他人同士となった。・・・小さい世界はもう残っていない。・・・なぜなら、幸福への呪文は〈儲かる社会〉だったからだ。」(抄、スウェーデンの環境の教科書から)。

「協力する社会」を目指したスウェーデンは財政再建を果たし、今では「希望の島」と称され、経済繁栄を謳歌している。それに対して、日本では、「競争する社会」を目指した結果、国民の半数以上が「日本は安全・安心の社会ではなくなった」と思っているなど、今や、お互いに協力しあって生きていく社会が音をたてて崩れようとしている。

農業を考える上で重要なことは、農業は、本来、協力原理で共同体的に営まれるもので、市場原理には基本的に馴染まないということである。また、農産物を工業生産物と同じように生産し、全国的に流通させようとしていることは農業の破壊ともいえる。

文化とは、「Culture：耕す」から始まっていることから判るように、耕すことを取り結ぶ人間の生活様式のことである。日本では、農業が文化を否定したために成り立たなくなり、「食」も崩壊して食料自給率が低下してしまった。地域を支えている産業循環や生活様式とは無関係に「発展なき拡大」を行った結果、地場産業が崩れて、生活様式も何もかもが全部破壊されてしまうという悲惨な現象が起きている。

ヨーロッパでは、それぞれの地域にそれぞれの文化が残っており、その文化を支える地場産業が残っている。文化を崩していないことは、一極集中が起こらず、近代的な建物が建っていないということによって簡単に判る。

今、時代は工業社会から知識社会に移ろうとしており、これからは「生活機能」が「生

産機能」を引きつける磁場となっていく。「そこに住みたい」、「そこで生活したい」という都市には、人材が集まり、魅力ある情報発信ができるようになる。現在、ヨーロッパが着目しているのは、キューバである。90年代始めにソ連が崩壊し輸入が激減すると、キューバでは食料自給のために空き地を耕地化し、有機農業や地産地消をやらざるを得なかった。しかし、このことが結果的にはキューバの伝統文化を復活させることになり、その魅力が世界から多くの観光客を呼び寄せている。

現在の経済学では、牧草地などの共同で利用される資源が、利用者の個人利益の追求の結果、荒廃していくという「コモンズの悲劇」が発生することになるので、私的所有権を設定することが効率的であるということが前提となっている。しかし、調べてみると、「コモンズの悲劇」はどこにも存在していないばかりか、実際には世界中にあるコモンズは、それぞれが適切に管理されているという事実が明らかとなっている。その中で、コモンズを最も巧みに管理している国民は日本人であり、現代の農が模範とすべきものは、弘法大師が行った満濃池の管理であるともいわれている。

地域の発展のためには、生態系に最も適した生活様式を発展させていくこと、知識を十二分に活用する知識集約農業にしていくこと、そして、「人間の絆」を復活させることにより協力社会を創造（コモンズを再生）していくことが必要なのではないか。

（文責 熱田健一）

第7回（2006年3月1日）

循環型社会と農業・農村

（京都大学大学院経済学研究科および地球環境学堂教授） 植田 和弘

人間の活動力、自然を改造する力は飛躍的に大きくなり、生命をも破壊することになりかねない。自然と人間の共生には「持続可能な発展」(Sustainable Development)が重要な概念となる。「持続可能な発展」にはさまざまな定義があるが、大きく二つのルーツがあり、一つは自然保護を目的とした環境的な持続可能性、もう一つは環境的な持続可能性を達成できる社会や経済ということ。自然と人間の共生理念を謳うだけでなく、自然と人間の共生をどう実現していくかが大きな課題となる。

人間は長い歴史の中で、物質を自然と人間との間で回し、物質循環や物質代謝をずっと行ってきた。メタボリズム (Metabolism) という語で脚光を浴びたときもあった。日本で循環型社会という考え方が具体化されたのは、確かに物の流れの一番最後をどう解決するかという廃棄物問題であったが、循環型社会の議論は、廃棄物をリサイクルする、減量するだけではなく、自然と人間との間での物質の循環や代謝の望ましい姿をどうしたら実現できるかという観点から考えるべきであろう。農業や林業は循環型社会づくりと関係の深い業といえる。今日の日本や世界の経済活動が物質循環や物質代謝をどのように変えて